

1 自己評価及び第三者評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	2872201120		
法人名	医療法人社団 西村医院		
事業所名	グループホームにしむら		
所在地	兵庫県加古川市野口町水足1857		
自己評価作成日	平成22年9月24日	評価結果市町村受理日	平成22年12月10日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kai-go-kouhyou-hyogo.jp/kai_gosi_p/i/nfomat_i_onPubl_i_c.do?JCD=2872201120&SCD=320
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 ライフ・デザイン研究所
所在地	兵庫県神戸市長田区菘乃町2-2-14
訪問調査日	平成22年10月1日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

利用者一人一人が最期まで輝いて生活できるよう、他職種の方たちとも連携を図りながら、看取りまで行っている。看取りまで行うことによって、利用者も家族も安心して日々の生活を送ることができている。
また、利用者や職員が積極的に地域に行くことで、地域の方たちのホームへの理解も深まりつつあり、交流する機会が増えてきた。今後も地域との交流を継続し、ホームが地域の拠点となるよう働きかけていきたい。

【第三者評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

建物は2ユニットが平屋の連棟(1ユニットが1棟)になっており、その中間領域は小川の流れるビオトープとなっている。建物周囲は、多くの植木や花が植えられた庭であり、緑に囲まれた穏やかな生活空間が見事に構築されています。利用者と職員が明るく仲良く暮らしている様子は、訪問者にとっても心安らぐホームです。ケアの内容も、利用者の心身状況の変化に合わせた個別の支援が、きめ細やかに出ています。事業所の自己評価や家族アンケート調査からは、職員と利用者や家族は、同じ方向を向いている事が良く分かります。地域に対する情報の発信もうまく機能しており、行政や同業者との連携もスムーズで地域の拠点となっています。理事長(医師)が医療機関との接点をサポートし、終末期における対応が無理なく出来ている数少ない貴重な事業所だといえます。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○ 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○ 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○ 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○ 1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○ 1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○ 1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない			

自己評価および第三者評価結果

自己	者三	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	一人一人に寄り添う、医療との連携、また地域とともになど、一人一人が輝いて生きられるようにといった理念を個々が把握、理解し実践している。	認知症の人達が、自分たちの力を発揮(エンパワメント)して「安住できる地域を作り上げる」という視点に立って、管理者および職員がともに支えあって暮らす場であることを目指しています。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	散歩や近所のお店などを利用することで、地域の方の目に触れ、ふれあい、馴染みの関係も築いている。また、地域行事にも積極的に参加、敬老会、清掃活動、秋祭り。つながりの会、介護者のつどい。	社会とのつながりを大切にし、利用者および家族の支援を行っています。近くの公民館を利用し、毎月定例的に「つながりの会」を開催し、認知症に対する理解を深める努力がされています。	地域が持っている社会資源を活用し、グループホームを接点として交流できる場の提供を、今後も継続して下さい。
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	認知症の方がどんどん街に出て行くことも、認知症理解へ繋がる一つであると考えています。その他、ホームでは職員3名がキャラバンメイトとなり、サポーター育成講座を開始。また、認知症フォーラムの開催、つながりの会の活動に参加。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	ホームでの実際の取り組みを報告、第三者評価の結果を公表。そして、改善すべき点などの意見を聞き、同じ地域づくりの一員としてあり続けられるよう努めている。	運営推進会議には、理事長(医師)が出席しており、利用者代表、家族会会長、ボランティア代表、町内会長、農区長など関係者との間で、定期的に情報や意見の交換がされています。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	事業所の状況を知って頂けるように取り組み、また、高齢者支援課、地域包括、社会福祉協議会とともに認知症ケア(キャラバンメイト連絡会)、看取りケアを地域に伝えている。	自己評価で記載されている以外にも、2市2町との連絡協議会などにも参加し、中学校のトライアルウィークも受け入れています。地域を巻き込んで、開かれたグループホームを目指しています。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	玄関の施錠は夜間のみ、日中は自由に入出りできる。身体拘束に関しては、拘束とならないように利用者に寄り添い理解しようと努めている。ペット柵については他の対応策でも事故(転倒)防げない場合に本人、家族の確認をとり行っている。	利用者にとって、当たり前な生活をすることを支援するのが基本となっています。夜間は防犯の意味で施錠をしているが、安全面を確保する視点であり、家族などへの説明もされています。	言葉掛けによる拘束については、まだまだ職員に対する研修が必要だと感じられている旨、研修の実施に期待をします。
7	(6)	○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	法について学ぶ機会は持っていないが、2市2町の勉強会で虐待防止に関する内容(職員のストレス)をテーマに学ぶ機会を作っている。また、職員の心身の状態にも注意を払うが、無意識に傷つけるような言葉かけがあるように感じる。	2市2町(加古川市、高砂市、稲美町、播磨町)のグループホームで行っている勉強会で、職員のメンタルケアについても学んでいる。今後、具体的な事例を用いた「虐待の防止」に取り組もうとされています。	

自己	者 第三	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8	(7)	○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	成年後見制度の利用などについては家族に伝えているが相談機関など伝える利用に行きつかない。職員については、そういった内容の講習会があれば参加できる体制は作っている。	職員に福祉専門職が多いこともあり、権利擁護に対する意識は高まっています。制度に関する理解を、家族にも広めていく努力をされています。	成年後見制度に対する説明会を、家族向けに開催することを検討されてはどうか？
9	(8)	○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	改定等の際は、個々のご家族の説明、また、家族会などの皆が集まる時にも十分な説明を行っている。	契約内容については家族会など、機会あるごとに改正点などの説明を行っています。	新規契約の場合、今後の事業所運営も視野に入れ、職員の研修も兼ねた取り組みに期待をしたい。
10	(9)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	利用者、ご家族と日常会話を積極的に行い、要望を言いやすい環境を作り、病気の時などゆるる心に合わせその都度話し合っている。また、利用者、家族の代表が、運営推進会議にも参加している。	利用者や家族からは、直接ホーム長に相談が来るような信頼関係ができています。くつろぎのスペースを設置したり、料理の種類を増やす取り組みなど、出された意見を反映した取り組みがされています。	
11	(10)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	毎月ミーティングを行い、その内容を理事長に伝え、働きやすい環境を作っている。しかし、職員全員の意見や思いが汲み取れ、反映できるような工夫がもう少し必要かもしれない。	毎月のミーティングは記録化され、運営推進会議には理事長が出席して確認しています。職員の意見を汲み取る仕組み作りが模索されています。	職員各個人がの年間目標を設定し、その達成度を確認する仕組みを検討してはどうか？
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	話し合う機会は少ないが、やりがいを持つよう努力している。昇給も年齢に関係なく努力に結びつけている。でも、それぞれの小さい力を大切にあまり差をつけたくない。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	必要な研修、社会福祉士などの資格取得をすすめ、法人内でも定期的に研修を行っている。また、2市2町の勉強会や他の研修にも参加できるような体制をつくり、その学びを日々の実践で伝えていくよう努めている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	隣接市町村(2市2町)にあるグループホームで、グループホーム協会を設立、兵庫県宅老所・グループホーム・グループハウス連絡会にも加入し、積極的に活動に参加している。また、市内ではキャラバンメイト連絡会、多職種連携会議にも参加。		

自己 者 第三	項目	自己評価	外部評価	
		実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援				
15	○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	本人、ご家族との会話を通しての反応、その方の言葉からだけでなく、様々な角度から状態を知ることが大切し、信頼してもらえ関係づくりに努めている。		
16	○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	本人はもちろんご家族の日頃からの思いに共感し、一緒にどうしたらよいか考えるように努め、来所の折は必ず、近況報告を行い、また毎月状態報告を行っている。		
17	○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	入居待機の長い方が多く、ご家族に待ってもらっているのもので、他のサービス利用はすすめていない。ただ、待機中他の施設の空き状況は伝えている。		
18	○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	本人のできることを、できないことを見極める。そして、職員が利用者の方に相談にのってもらったりと、お互いが頼りにし合う関係を築き、さらに深められるよう努めている。		
19	○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	ホームでの日常生活の様子を伝え、体調が悪く悪い時はもちろん、家族の力を大切にし、訪問時にも共に過ごす時間を持ってもらっている。ただ、少しホーム側がやり過ぎていると感じる時がある。		
20	(11) ○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	友人との連絡が途切れないように支援したり、また、会話に登場させたりしている。そして、これまで住んでいた場所、故郷などを大切に、共に訪問している。	馴染みの関係維持について、民生委員や自治会など、地域との関係性を大切にしている。利用者の希望に即し、「故郷」を訪ねる取り組みもしています。	
21	○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	寝たきりの方の居室に遊びに行ったり、そうした方にも皆の声が届くように支援している。そして、利用者同士が自然な形で繋がっていきけるような支援を心がけている。ただやはり、目の離せない方が増えた場合寂しい思いをしている人がいる。		

自己	者	第三	項目	自己評価	外部評価	
				実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22			○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	お亡くなりなり、契約終了となった後も、ご家族の方が近くに来たからと立ち寄って下さったり、ホームを訪問してもらっている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント						
23	(12)		○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	本人の生活暦や思い、そして体調を知ることが重要で、そのために会話の中、また視線のゆくえなどから知るように努めている。	利用者の生活暦などを聴きとり、基本資料としてのバックグラウンドシートを作成している。利用者の思いや意向を把握するために、日々の記録から気づき(再アセスメント)を拾い出し、書き加えています。	
24			○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	本人、ご家族との会話の中から見つけ、生活を知るよう努めている。バックグラウンドの活用。		
25			○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	一日の過ごし方だけでなく、週単位などの変化も知り、心を知る努力をしている。さらに、一つの行為の中にある、動きのひとつひとつにも注意し、できないことを職員ができることへと繋いでいけるよう努めている。		
26	(13)		○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	本人との、普段の会話や様々な状況の中より、課題やケアのあり方を探り、また毎月のミーティングでの話し合いをケアプランに反映している。	毎月、必要な関係者との話し合いでケアプランについて検討する仕組みが出来ている。利用者の日常会話記録ノートを作っている。アセスメント記録の活用が今後の課題となっています。	
27			○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	個別に記録し、体調の悪い方には、食事・水分摂取量、バイタルチェックなどの記録し、ケアに役立てている。また、個々の言葉や表情など小さなことまで共有できるように努め、介護計画の見直しに活かしている。		
28			○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	対応が遅れることはあるが、本人の状況にあった支援ができるように努めている。また、ご家族への健康へのサポート、ボランティアさんの個別への対応、社協との協力なども行っている。		

自己	者三	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	近くの田、鎮守の森、展覧会など本人の好きなことで、刺激を受けるよう支援している。また、これからは地域で行われている活動にももっと参加できればと思う。		
30	(14)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	自分の思いを伝えられる方は、毎月の主治医の往診の時に伝えている。本人の意志が伝えられない方は、家族の意見を聞き本人にとってよい方向となるよう支援している。また、体調の変化に応じて、主治医、看護師が訪問。	家族および利用者の希望で、全員協力医の受診をしている。医療行為が必要な場合は、訪問看護が対応し、個別の通院が必要な場合は、原則として家族が対応している。薬局を一本化したことにより、2週間毎の服薬管理がスムーズにできています。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	糖尿病の方、バルーンの管理など看護師が毎日訪問、その都度、利用者の細かい体調の変化を伝えている。		
32	(15)	○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	骨折の手術のための入院の場合も病院関係者と話し合い、一週間で退院している。受診時は家族と同行。	入院時のカンファレンスでは、ホーム長が同席し、早期退院に向けての話し合いをしている。退院に向けてのカンファレンスには、ホーム長が必ず出席し、協力医も出席しています。	
33	(16)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	看取りの指針があり、現在まで16名の方をホームで看取った。	家族との話し合いにおいて、「利用者および家族を支える視点」が出来ており、信頼関係が構築されている。訪問看護ステーションと24時間の連携体制があり、職員および家族の心の準備も出ています。	今後、マニュアル作りや、家族OBとの意見交換などへの取り組みが期待されます。
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	おこりうる可能性の高い急変については対応できているが全てに対応できるとはいえないし定期的な訓練はできていない。急変時の対応ということで研修を行ったことはありその学びを日々の業務の中で実践力として身につけるよう努めている。		
35	(17)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	年に2回、火災(夜間発生も想定)を中心とした避難訓練を行っている。また、これからは地域の方も巻き込んだ訓練ができればと考えている。非常食、防災グッズもそろえている。	避難の想定では、ADLの状況から優先順位を確認しあっている。消防車が来ると、近隣のボランティアも積極的に協力してくれている。非常食の入替え時期(9月)にも、イベントを行って試食をしています。	

自己	者 第三	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(18)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	関係がなじみとなり、親しみのある言葉がけ、関わりとなっているが、職員のなれから、無意識のうちに言葉がけがきつくなり、傷つけていることがある。	利用者とのコミュニケーションが出来る環境作りを大切にしている。言葉掛けのタイミングや、話しかける心のゆとりを持てる人材を育てることの重要性を理解されています。	客観視できる人材を育てる努力に期待をしたい。
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	どのような場面でも、選択できるような言葉がけに努めている。また、本人の思いや希望を表現することができる機会を作り、大切にしている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	一人ひとり、その日の心身の状況に応じて、本人のペース、気持ちに配慮しながら支援しているが、本当に本人にとってどうなのか希望とケアで悩むところ。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	ご自分の好みの服を探し選んでもらっている。また、お化粧が好きだった方、今もされている方が続けていけるように、化粧品を買いにでかけたり、外出時、行事の時にできるよう働きかけている。		
40	(19)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	好みをなるべくとり入れるようにしつつ食欲の落ちた時などその人その人に合わせていく。また、料理では切る、炒める、味付け、もりつけなどそれぞれの得意を活かし、分業で協力し一つのを皆で作る喜びを感じてもらえるよう努めている。	調理に取り組める人は、残存能力をフルに使って参加してもらっている。献立表は当日作るの、食材などを見てから決めている。(記録は残している)朝食では、バイキング形式なども取り入れ、ソーメン流しやお寿司定食など、季節感のあるものとしています。	ごく一般の家庭で行われている雰囲気、今後も継続できることが望まれます。(食事時にTVを切って、雰囲気を変えていることも評価できます。)
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	普段は行っていないが、体調の悪化の場合、食事・水分摂取量などの記録をとり、すばやく対応できるようにしている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後はできていないが、起床時、就寝時の2回、個々に応じた口腔ケアを行っている。		

自己 者 第三	項目	自己評価	外部評価	
		実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(20) ○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	個々の状態に合わせて下着を使い分け、排泄のパターン、習慣を把握。そして、本人の意志と力でトイレに付けるように支援している。言葉がけ、環境の面で、自尊心、プライバシーへの配慮がまだ足りないように感じる。	年々利用者のADLが低下しており、状況により下着などの使い分けをしている。また、深夜や早朝、食後などの時間帯の把握をすることで、自立に向けた支援がされています。	言葉がけや、扉の開閉など、プライバシーへの配慮について、さらなる取り組みが望まれます。
44	○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	服薬のある方は、その時の状況を観察し、個々ののに応じて対応している。水分補給や運動、効果ある食材(カスピ海ヨーグルト、バナナ酢)、などなるべく薬に頼らないようにはしている。		
45	(21) ○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	入浴したい時にできるだけ入れるように努力し、入浴もその方のペースに合わせて入ってもらっている。しかし、介助が必要な方に対しては、こちら側が入浴する機会を決めてしまっているところがある。銭湯、温泉に行き場所を変えることも。	全ての人が多く入れるように、ローテーションを組んで対応している。外部の銭湯や温泉なども利用しており、隣接するデイサービスの浴場も利用している。利用者の安心・安全を第一に心がけています。	今後も、入浴時の会話アセスメントも活かした介護計画の作成に期待をします。
46	○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	横になっても、座っていてもその方に合った安楽な姿勢(ポジショニングも含め)をとってもらおうよう努めている。希望ならば、眠っていただくが、ケアとの間で悩む。		
47	○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	症状の変化にすばやく気づくことの大切さを職員に常に伝えている。また、薬の使用の理解、医師、看護師、薬剤師との連携。		
48	○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	生活歴、日々の生活、会話の中より新たな発見をすることで、これまでの人生の中での自信や興味あることに対し、共に取り組み、達成感や喜びを感じてもらえるように支援。		
49	(22) ○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	その時の体調に合わせて、本人が行きたいと言われるとどこまで行けるように努力している。また、意思を伝えられない方には、その日の天気や気温、こんな花が咲いているなどの様子を伝え、そそり散歩など外出できるようにしている。	天気の良い日は外に出て、外気に触れることを心がけている。午前中、一人で散歩している人もおり、近隣の人たちが見守りをしてきている。遠方へ出かける場合、家族やボランティアの協力も得られています。	

自己 者 第三	項目	自己評価	外部評価	
		実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50	○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	希望の方は、お金を持ち近くのお店に行き、自由に使えるように支援している。管理が困難な方は、職員が同行し使えるように支援している。		
51	○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	本人が希望する時、その都度手紙や電話をしてもらっている。また、時期により挨拶状、家族からの贈り物に、喜び、御礼の手紙や電話をしている。プライバシーにも配慮している。		
52	(23) ○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	寝たきりの方でも、目で楽しむことができるよう、居室に飾り物や絵、写真を貼ったりと工夫をしている。また、季節を感じてもらえるように、季節の花を活けたり、飾りものを置く。	2ユニットが平行して建てられている間に、共用空間としてのビオトープと玄関入り口があり、四季の移ろいを感じることが出来る。廊下の片側には、手摺り代わりの収納棚があり、所々がベンチとして寛げるコーナーになっている。広い対面キッチンや、明るく通風の良い空間には生活感があふれています。	仕事の効率化の上で、職員全体が共有する書類等の整備に、一工夫されるとよいのでは？
53	○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	廊下のベンチが利用者の憩いの場となっている。ホールでは3人掛けのソファ、冬にはコタツで過ごされている。また、利用者同士で、話せるように会話を繋いだり、お友達同士で部屋を歩き来している。そういう場面を大切にしている。		
54	(24) ○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	家具や普段使用する物は、本人の使い慣れた物、思い入れがある物を持ってきてもらっている。居室に入ったらホッとできるように努力している。	各室には、洗面、トイレ、クーラー、カーテンが設けられている。利用者は、仏壇、たんす、アルバム、絵画等、使い慣れた物や思い入れのある物を自由に持ち込んでいる。バルコニー手摺りも、洗濯を干すのに使いやすく作られています。	
55	○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	その方の力を把握した上で、一人で散歩や買い物、また、見守りながら。建物内部は、危険なものを取り除き、自立できるように工夫している。場所が分かるようにお風呂、お手洗いなどの表示もしている。		